土木遠景 第九回 明石海峡大橋

［文・写真］大村 拓也

前日の撮影が空振りに終わった私にとって、同じ週に再び大阪へ行くことは正直、気が引けた。しかし、これが最後のチャンスかもしれなかった。次の日の天気予報に「朝焼け・夕焼けが楽しめる」とあった。その一文が、私の背中を押した。不可能を証明することは、きわめて難しい。

午前中の現場取材を終え、即刻事務所へ戻る。作業着から普段着に着替え、ヘルメットと安全帯を降ろすと、カメラバッグから広角レンズを取り出し、代わりに望遠レンズを詰め込んだ。懐中電灯も欠かせない。インターネットを開き、東大阪と北淡、高松など各地域の天気予報を再度確認し、新幹線に飛び乗った。

午後5時。太陽が高度を下げるにしたがって、淡路島のシルエットが徐々に浮かび上がってきた。これならいける。だが、そう思ったのもつかの間、大阪湾上空に雲が増えてきてしまった。どこまで続いているのか。スモッグで視界がかすんで、雲の切れ間も判断がつかない。日差しがなくなった途端、汗ばんだ衣服の下に寒気が走った。

日の入り時刻は、午後5時43分。日の入り10分前になっても、太陽は雲に隠れたまま。西の空がわずかに赤く染まっているものの、スモッグで灰色に霞んでいる。

もはやこれまでと、すでに覚悟を決めていた日の入り6分前、空が明るくなり、ついに雲が抜けた。そして、夕焼けになった水平線には、明石海峡大橋のシルエットがくっきりと浮かび上がった。夢にまで見た光景だ。

2本の主塔が、両岸の山の高さに匹敵するほど高く聳(そび)え立つ。手前の大阪港周辺に架かる名だたるどの長大橋よりもずっと大きい。その姿は、近くで見上げたときの迫力とは異なり、地球的なスケールを物語っているようだ。カメラのシャッターを切りながら、日本一の橋に思わず手を合わせた。

おおむら・たくや
1982年生まれ。写真家。
大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦労して修めた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

［撮影地］大阪府東大阪市
大阪府民の森なるかわ園地

© OMURA Takuya